

人質王女は居残り希望

## 登場人物 紹介



エルミラ

スランシュの同僚の女官。  
プライドが高く、意地が悪い。



マルタ

スランシュの侍女。  
愛情を持ってスランシュを育ててくれた。



バスコ

スランシュの教師。  
高い見識を備えた人物。



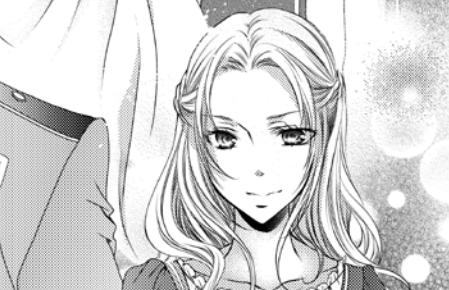
リカルド

大国イスパニラの国王。  
優しく穏やかだが戦上手で知られ、「赤い悪鬼」の名で近隣諸国から恐れられている。



セシリオ

リカルドの弟。  
兄と違い、女性に愛想が良いが女官には厳しい。



ルナ

スランシュの親友。  
要領が良く、とても頼りになる。



スランシュ

シャノワール国の第八王女。  
明るく前向きな性格。  
人質としてイスパニラで暮らしていたものある日、解放されることになり——

## プロローグ

——陛下を、激怒、させて、しまった!!

強大な国、イスパニラの国王・リカルドを前に、ブランシュは顔から血の気が引くのを感じた。ブランシュ——ブランシュ・ロゼス・シャノワールは小国の人質だ。

ただし、祖国シャノワールにいたのは僅か一歳まで。それからはずっと人質として、ここイスパニラの王宮で暮らしている。

だからブランシュは、幼い頃からリカルドを知っていた。その彼にこんな鋭い視線を向けられたのは初めてだ。

窓から差し込む強い陽光の中、いつも優しい光を湛えていた瞳が、明らかに激しい怒りを込めてこちらを睨んでいる。

三十路を少し過ぎたりカルドは、目鼻立ちのくつきりと整った偉丈夫だ。髪を短く整え、鍛え抜かれた身体に飾り気のない衣服を身につけている。

大陸の霸者と呼ばれる大国の王としては、随分と質素な装いだった。彼は少年時代から、王宮に

いるよりも戦場で兵を率いていた時間の方がずっと長かつたために、華美な服を好まない。

もつとも、豪奢な宮廷服や勇ましい鎧兜をつけていなくとも、彼は自身だけで、周囲を圧倒する存在感を有している。

そんな彼に睨みつけられ、ブランシュは怖いというよりも悲しくなった。

本来リカルドは威圧的な人物ではない。常日頃の彼は、王宮で働く者や国民を気遣う、誠実で優しい王だ。

強い力を持つ人は傲慢になりがちだというが、リカルドは違つた。

強大な國の王であると同時に、武人としてもすば抜けた才覚を持つていながら、決して不用意にそれを使わない。力に自惚れず、欲望に呑み込まれない強い自制心を誇っている。

そんな彼にブランシュは、どうしようもないほど惹かれてしまつているのだ。

幼い頃はまだ良かつた。当時は王太子だった彼を見て素敵なお子様だと憧れ、時折話せるだけでも十分に満足できた。

ずっと、そうして憧れていればいいのに……愚かにも、彼へ抱く気持ちを恋心に変えてしまつた。ブランシュは貧しい小国<sup>末</sup>の末王女だ。リカルドとは釣り合うはずがない。それをよく承知しているから、彼女はこの想いを隠している。

ただ、せめて少しでもリカルドの役に立ちたいと思い、人質の身から解放されたあと、女官として働いていた。そして、酷く胸を抉られる仕事——彼の妃として最もふさわしい令嬢を見定め、その資料をリカルドに見せたのだ。

なのに先ほどブランシュの作った書類を読んだリカルドは、見る見るうちに表情を険しくし、凄まじい勢いでその書類を引き裂いてしまつた。

彼の青い瞳に、目を大きく見開いて震えている自分が映つていて。ブランシュはそれを茫然と眺めた——

イスパニラはかつて、殆ど**ほど**の民が農牧と狩猟で暮らす平和な国だった。

だが、日照りによる飢饉に耐え兼ね、他国に攻め込んだのをきっかけにその進路を変える。

結果、イスパニラは驚くほど簡単に他国に勝ち、その財を奪う。そうして、イスパニラ国民達は剣で奪い取ることに味をしめ、周辺諸国に戦を仕掛けては、着々と領土を拡大していく。

葡萄酒の赤を表していた国旗の赤は、いつしか血の色へと意味を変え、鍬と牛の図柄は鋭い剣と獰猛なドラゴンに変更された。

こうしてイスパニラは軍事国家となる。

特に数十年前に即位した現王のディエゴは、三度の飯より戦が好きと言われるほどの凶暴な王だ。

彼は実の兄を殺して王座を奪い取ると、自分の息子すらも戦の道具とした。

勇猛果敢な長男リカルドを常に過酷な戦場に立たせ、知略に長けた次男セシリオには諸外国の情報をもとに謀略をめぐらさせていた。

暴虐なドラゴンのごとき強国イスパニラに、武力に乏しい周辺の小国は震え上がる。中には戦いもせずに全面降伏し、属国に下る国もあつた。シャノワール国もその一つだ。

シャノワール国は小高い山に囲まれた小さな国で、国民は牧羊と湖の漁業で慎ましく暮らして

いる。

交通の便が悪い、そんな貧しい国をわざわざ大国が相手にすまいと思っていたある日、シャノワール王のもとを突然、イスパニラ国王ディエゴの使者が訪れた。

使者が携えた文は表向き同盟関係を申し込む親書であったものの、事実上、属国になれという内容だ。断れば即座に攻め入られて、たちまち負けるのは目に見えていた。

そうなつた場合、シャノワール王家の血縁者は全員斬首。民の財産は没収され、イスパニラ国で奴隸扱いを受ける。逆に大人しく属国に下り、税の徴収や人夫の提供などの要求を呑みさえすれば、国民は隸属させられることなく財産が保障される。シャノワール王家の名もそのまま残せるのだ。

どう考へても、属国に下るのが最善の策だった。

しかし、シャノワール国王は突き付けられた要求の最後に記された項目を見て苦悩する。

それは、王家人間を誰か一人、行儀見習いとしてイスパニラ王宮へ遣わせよというものだつた。当然ながら行儀見習いは名目で、つまりは人質だ。

イスパニラ王宮の一角には、こうして集められた属国の王族達が人質として暮らしている離宮があると有名だつた。

仲むづまじいシャノワール国王夫妻は、姫ばかりでも八人の子宝に恵まれている。

娘は全員、分け隔てなく可愛い。誰一人として人質になど出したくない。だが、国民を守るのは王家の義務だ。

シャノワール国王は何日も苦悩し、どうどうじき一歳になる末娘のブランシュをイスパニラ国へ

渡すと決めた。

言葉も慣習も違う異国で長く過ごすなら、まだ何もわからぬ赤子の方が良いと判断したことだ。こうして王女ブランシユ・ロゼス・シャノワールは、遠いイスパニラ国の王宮に預けられた。故郷から付き添つた乳母<sup>うば</sup>は人質用の離宮に王女を渡すとすぐに帰され、ブランシユにはマルタというイスパニラ人の侍女がつけられる。

彼女は夫を戦<sup>いくさ</sup>で亡くしたばかりで、長年望んでいた子を身籠<sup>みごも</sup>つたものの死産してしまった。

そこで、離宮に囚われる幼い人質王女と一緒に住む侍女兼乳母<sup>うば</sup>として選ばれたのだ。

マルタは美人ではないが、よく気のつく優しい女性で、幼くして両親と離されたブランシユを不憫<sup>ひん</sup>に想い、亡くした我が子の分まで愛情を注いだ。

元々、よく笑う元気な子だったブランシユはすぐにマルタへ懐き、与えられた小さな離宮を快適な我が家と認識するようになったのだ。

人質の王族が住む平屋の離宮が立ち並ぶそこは、俗に『囚われの庭』と呼ばれている。個々の建物にはささやかな庭がつき、それを高い常緑樹の垣根がぐるりと囲む。

人質王族は与えられた建物と庭より出られず、会えるのは王宮に仕えるイスパニラ人のみだ。とはいって、祖国がイスパニラに反旗を翻さない限りは王族として不自由のない生活が保障される。

閉塞感<sup>へいそくかん</sup>や祖国から切り捨てられないかという不安から気鬱<sup>きう</sup>になる人もいたが、ブランシユは狭い離宮の世界を当たり前のものとして受け入れ、マルタの愛情のもとすくすくと健康に育つた。

費沢<sup>ひざく</sup>を言えば、友人というものが欲しい。離宮には使用人の子どもたつて連れてくることができ

ないのだ。

そんなある日マルタがせめてもの友人代わりにと、猫を飼う許可を貰つてきてくれた。六歳の誕生日に渡されたバスケットから、しつぽのすんなりした白い子猫が飛び出した時、ブランシユがどんなに大喜びしたことか！

やんちやで元気の良い雄の子猫はティグと命名され、ブランシユ王女の初めての友といふ榮誉<sup>たまよ</sup>を賜ることになったのだ。

言葉は通じなくともブランシユはティグが大好きになり、白猫の方も彼女によく懐いた。さらに時が経ち、ブランシユが八歳になつたある夏の日。彼女は庭でティグを呼んでいた。

\* \* \*

「ティグ～！ 帰つていらっしゃい！ 大好きなお魚よ～！」

強い夏の陽射しが降り注ぐ中、餌皿<sup>えいばら</sup>を手にしたブランシユは愛猫を何度も呼びながら、植え込みで区切られた狭い庭をうろうろする。

この建物と庭から出ではいけないという規則は、どんなにブランシユが言い聞かせても、猫のテイグには理解できないようだつた。賢い彼は前足を器用に使って戸を開けては、ブランシユの目を盗んで庭に出る。連れ戻<sup>へ</sup>そうと追いかければ、垣根の下を素早く潜り抜け庭から出てしまうのだ。それでもご飯の時間になればちゃんと戻つてこない。

探しに出てくれたマルタも戻らないし、一秒ごとに不安が迫り上がってきた。

（どうしよう……今日の見回り衛兵は、あの意地悪なおじさんだったのに……）

マルタが出ていった直後に離宮へ顔を見せた衛兵の赤ら顔を思い出して、餌皿を持つブランシユの手に汗がじつとり滲んだ。

人質の脱走を防ぐために、囚われの庭には毎日、不定期な時刻に衛兵が見回りに入る。

衛兵が小窓についた呼び鈴を鳴らしたら、人質の王族は顔を見せなくてはいけないのだ。

親切な人なら見回りのついでにご用聞きをしてくれたりするが、そんな親切な衛兵ばかりではな

い。今日の当番は中でも一番嫌な衛兵だつた。

あの衛兵はマルタにも威張った態度を取るが、小窓から見えるのがブランシユだけでマルタがないとわかると、いつそう意地が悪くなる。

ティグに向かつて『薄汚い猫なんか番犬に食わせてやれば良いのだ』ののしと罵り、ブランシユに『王女といつても、お前さんは親に捨てられた惨めな子だ』なんて酷い嘘をつくのだ。

両親や姉達の顔は覚えていないが、季節の挨拶の手紙や誕生日の贈り物は欠かさず届く。

それに、ブランシユが無事に暮らせるようにお父様達は祖国で頑張っているのだから寂しくても恨んではいけない、とマルタが教えてくれていた。

意地悪な衛兵より、マルタの言葉を信じるに決まつていてる。

だから今までは、衛兵が帰つたらすぐに小窓をピシャンと閉め、あの嫌な顔と酷い言葉を忘れる

ことにしていたのだ。

でも、今日はそうできなかつた。

もしも、あの衛兵が外をうろついているティグを見つけ捕まえてしまつたらと思うと、心臓がバクバクして胸が苦しい。暑いのに汗がやけに冷たくて、苦い唾つばが湧いてくる。

（マルタが早く見つけてくれば……ううん、私も外に行つて探せれば良いのに！）

たつた一人の大好きな友を探しにいくことすらできない。初めて心の底から、囚われの身が忌々しいと思った。

「ティグ！ 帰つてきて！」

涙混じりの声で叫んだ時、背後で垣根がガサガサと揺れた。

「ティグ!?」

振り返ると、垣根の向こうに見知らぬ青年がいて、片手でティグの首を掴み上げている。

「この猫が搜索しているティグだろうか？」

そう尋ねた青年は、鷹たかのように鋭い青い瞳をしていた。垣根越しに肩まで見えるということは、相當に背が高いはずだ。短く刈られた黒髪は、強い陽に透けると褐色に見える。

襟えりもとに刺繡しじゅうが入つた濃い色の上着が、強面こわがほでも品の良さを感じさせる青年によく似合つていた。

囚われの庭へ入れるのは人質の教育係か見張りの衛兵だけなのに、彼はどちらにも見えない。自分の知る範囲外の人物を前に、ブランシユは黙つて頷うなづくのが精一杯だつた。

青年は気を悪くした様子もなく、垣根の向こうから腕を伸ばしてティグを慎重に下ろしてくれる。白猫はひょいと地面へ飛び下りると、何にも悪いことなんとしていません、という顔でブラン

シユの足に身体をこすりつけ、餌皿を見上げてニヤアニヤアと強請り始めた。  
「首輪に名前が書いてあつて良かった」

青年が笑うと、ちょっと怖そうな顔がとても優しげに見える。

「あの、あの……ありがとうございました……」

しどろもどろの小声で、ブランシユはようやく礼を言えた。

「いや。そなたの声が聞こえた後、ちょうど迷い猫を保護したのでな」

片手を振って何でもないことのように青年は言つたけれど、よく見れば彼の髪や肩に小枝が引っかかっているし、鼻先は土で汚れている。

もしかしたら、素早いティゲを捕まえるために結構苦労してくれたのではないだろうか？

そんな考えが頭に浮かぶと、警戒がいつそう解けて、見知らぬ青年がより素敵に見えてきた。

「ところで、そなたはシャノワール國の姫だな？」

もつときちんとお礼を言わなくてはとドキドキしていると、向こうから先に素性を確認された。

ブランシユは思わず飛び上がりそうになる。

「はい！ シャノワール國第八王女ブランシユ・ロゼス・シャノワールにございます！」

緊張しつつ、習った通りにドレスの裾を揃<sup>ま</sup>んでお辞儀をする。

（確か、これで良かつたと思うのだけど……）

心配になり、チラッと青年を見上げたら、彼の微笑がいつそう優しくなっていた。

「そなたがここに来た時に一目会つたが、大きくなつたな」



「え……？」

失礼にならないよう彼が誰なのか尋ねる言葉を考えていると、また青年が先に口を開いた。

「ここに暮らしに不便はないか？」

「あ、ありません。とても良くしていただきております。——あ、今日はティグを探しにいけなくて困りましたが、親切な貴方がいらっしゃって良かつたです！」

正直に答えると、彼はなぜか少し悲しそうに苦笑した。

「私が親切、か……ありがとう。可愛い、色鮮やかなお姫様」  
「色鮮やか？」

可愛いと言われたのは素直に嬉しい。けれど、その後に続く不思議な表現に、ブランシュは思わず首を傾げた。

すると、悲しげだった青年の笑みが、僅かに柔らかなものに変わる。

「あなたの祖国の言葉でブランシュは白、ロゼは薔薇色、ノワールは黒だ。初めて聞いた時にも、とても綺麗な名前だと思った」

それを聞き、ブランシュは恥ずかしさで自分の顔に血が上るのを感じた。

自分の名前に素敵な言葉が隠れていたことも、それをこの青年に褒めてもらえたのも嬉しいけれど、王女のくせに自分の国の言葉に無知だということがバレてしまつた。

「お、教えてくださつて、ありがとうございます」

もじもじとお礼を言うと、青年はブランシュの気まずい思いを読みとつたみたいだ。

「ブランシュ姫はずつとここで育つたのだから、祖国の言葉はこれから学ぶのだろうな」  
励ますように言われ、ブランシュは懸命にコクコクと頷いた。

「はい！ 先月から教えていただいておりますので、頑張ります！」

人質の身とはいえ、行儀作法を含めて、王族の姫らしい教育は受けさせてもらつていて。イスパニラ語の読み書きの他に、裁縫や算術、歴史、祖国の言葉を学んでいた。

けれども、シャノワール国を含む山間部の小国群で使われる言葉は、イスパニラ語とは文法も文字も発音も全く違う。祖国の言葉といつても、ずっとここで暮らしていたブランシュには耳に馴染まず、なかなか覚えられなかつた。

「そなたの国の言葉をよく学んでおくと良い。いつかきっと必要になるはずだ。では、失礼する。ブランシュ姫」

青年は軽く礼をすると、さつと踵を返して立ち去つていった。

名残り惜しくて、ブランシュは行儀が悪いのを承知で背伸びしたりピヨンピヨンと飛び跳ねたりする。それでも、高い垣根に阻まれてすぐにその姿は見えなくなつてしまつた。

青年が去つた直後入れ違いに帰ってきたマルタへ、ブランシュは興奮したままティグを届けてくれた彼の話をした。

あの素敵なかわいらしい青年は誰なのかと聞くと、マルタはブランシュを落ち着かせるためにお茶を淹れながら教えてくれる。  
「多分、その方は、王太子のリカルド殿下ですよ」

「まあ、そうだったのね！」

彼の口調からイスパニラの王族かもしれないとは思っていたが、驚きについ声を上げる。  
現イスパニラ国王「ディエゴ」の長男で筆頭将軍を務めているリカルドは、確かにランシュよりも十五歳年上と聞いていた。

人質王族はイスパニラ国に着くと、囚われの庭へ入る前に国王と王太子に謁見することになつて、いる。だからランシュも彼と対面したはずだが、何しろ赤子だったので全く覚えていない。

それに、見回りの衛兵や侍女達がディエゴを怖がつてゐるし、その王の手足となつて働く王太子だから、ランシュはもつと怖い人を想像していた。

「とっても優しい方だつたわ。ティグを見つけてくださつたのよ」

ランシュはお茶に添えられたチョコレート菓子を眺め、リカルドの陽に透けた髪の色をうつと、り思い出す。笑うと優しい雰囲気になる鋭い瞳が、とても素敵だつた。

いくらでも思い出に浸つていらしあつたが、一つ気になることがあつたのでランシュは、チョコレートから目を離し、マルタに尋ねた。

「本当に親切な方だつたのに、私が『親切な貴方がいらつしやつて良かつた』と言つたら、リカルド様は悲しそうなお顔になつてしまつたの……私、失礼なことを言つてしまつたのかしら？」

あの悲しそうな苦笑を思い出すと、何だか胸が痛くなる。

長く王宮に仕えているマルタは、ランシュの疑問に顔を曇らせた。

「そのようなことはありませんよ。リカルド様は下々の者にまで気を配り、皆の生活を良くするた

めに心を碎いてくださる優しい方です。ただ……」

絶対に内緒ですよと、彼女は声を潜める。

「ディエゴ陛下のご命令とはいえ、他国を攻めることにリカルド様は大変な罪悪感を抱いておられるみたいです。祖国を離れてこの離宮に住まわれている方々に対しても」

囚われの庭に住む者の中には、人質の身を嘆いてイスパニラ国王を恨み、王太子であるリカルドをも憎む者がいる。

リカルドは彼らが少しでも快適に暮らせるよう密かに使用人達へ指示を出ししたりしているのに。その事実を人質達に明かして弁解しようとしているが、マルタは言う。

異国で軟禁状態に置かれている彼らが、己を人質に選んだ祖国の家族を憎むようになつてほしくない。それより、元凶であるイスパニラの武力——筆頭将軍の自分に怒りを向ける方がいい、リカルドは言つてゐるそうだ。

「リカルド様は、不快な思いをさせないためにと、特別な用がなければここにはいらつしやいません。ですからランシュ様にも名乗らなかつたのだろうと思ひます」

痛ましそうに締めくくられたマルタの話に、ランシュは驚き憤慨した。

「私も囚われの身だけれど、ここに来たのはディエゴ陛下のご命令で、リカルド様のせいだなんて思わないわ。だって、誰も陛下のご命令には逆らえないのでしょうか？ そんなことをしたら、リカルド様の周りの人まで罰せられてしまうもの」

ディエゴがどれほど残虐な国王かは、離宮から出られないランシュの耳にすら入るほどだ。

いや、あえて知らせるようにしていいるに違いない。人質達が逆らう気など起こさないよう。年を追うごとに疑い深くなるディエゴは、自分に反逆する者を日夜探し回っている。

密告が奨励され、少しでも謀反を疑われた廷臣は、一族郎党からその家の使用人までが残酷な拷問の末に処刑されてしまうらしい。

敵となるなら我が子であれど容赦しない、と暴君は公言している。

もしリカルドが父王へ刃向かう素振りなど見せたら、彼自身だけでなく直属の部下や召使達も全員、巻き添えになつてしまはずだ。

「……ブランシュ様のおっしゃる通りです。けれど、滅ぼされた国や属國の方達の多くは、筆頭将軍のリカルド様を強く憎んでおられます。王に媚びへつらい他国を滅ぼし回つてゐる悪鬼だなどと、酷い言われようです」

溜め息混じりに、マルタはリカルドに対する世間の評価を教えてくれた。

「世の中つて厳しいね」

ブランシュは大人ぶつて無難な意見を口にしたもの、自分の正直な気持ちも付け加える。

「でも私は、リカルド様が大好きになつたわ。ねえ、ティグもそうよね？」

テーブルの足もとでミルクを貰つていたティグに同意を求めるど、白猫はバタンと尾を一振りし、賛成の意を示してくれた。

その晩。ブランシュは床に入つてからもリカルドのことが頭から離れず、なかなか寝つけなかつた。

かつた。

それでもいつしか瞼まぶたが重くなり、いつの間にか眠りに落ちていただらしい。

ブランシュは、夢の中ですつかり大人になつた自分がとても綺麗な広間にいるのだと気がついた。壁は白と金で、天井には数え切れないほどのキラキラした不思議な光が灯り、大きな窓には真紅しんくのカーテン。まるで話に聞く、イスパニラ王宮の大広間そのものだ。

人質で、しかも子どものブランシュは勿論そんな場所にいけるはずもなかつたが、マルタから話は聞いていた。

周囲には大勢の大人がいて、誰もが立派な礼服や豪華なドレスを着ている。

嬉しいことにブランシュも、ちゃんと董色すみれいろの美しいドレスを着ていた。

つけていた白い光沢のある手袋をとつて、おそるおそるスカートを撫なななでてみれば、しつとりと重い生地は信じられないほど滑らかな手触りだ。もしやこれが極上の絹というものかと、ブランシュはその手触りを大いに楽しんだ。

周りを見るとどうやら舞踏会の真つ最中らしく、あちこちで男の人と女の人が手を取り合い楽しそうに踊つてゐる。

でも不思議なことに音は全く聞こえなかつた。

楽器を演奏してゐる人達がいても一つの音も届かず、周りの人々も笑顔で語り合つてゐるよう

のに口をパクパクさせてゐるだけだ。

不思議に思いながらもブランシュが太い柱の陰から顔を出し大広間を見渡すと、大勢の姫君が集

まつている華やかな一角があつた。髪を結い上げて宝石で飾り、うつとりするほど豪華で綺麗なドレスを着たそのお姫様達は、一人の男の人を取り囲んでいた。

(リカルド様だわ!)

真紅の礼服を着て姫君達へ丁寧にお辞儀をしている彼は、まだ青年のはずのリカルドより、ちょっと年をとっているように見えた。それでも一目で彼だとわかる。

この夢ではブランシュが大人なのだから、彼もそれなりの年になつていたつておかしくない。

(おじ様になつたりカルド様も素敵!)

渋みを増した雰囲気の彼に、ブランシュは目を輝かせる。

夢の中のリカルドはせいぜい三十代の前半といったところだが、子どもの感覚では『おじさん』に分類された。

(綺麗なお姫様達があんなに大勢、リカルド様を夢中で囲んで……お伽噺みたい!)

ブランシュは惚れ惚れとりカルドを眺める。

彼はきっと一番美しいお姫様の手を取つて踊るだろう。そして、そのお姫様を花嫁にするかもしれない。

(……あら?)

自分は何かを選ばなくてはいけないような気がする。

何を選ぶのかと首を傾げた瞬間に目が覚め、ブランシュはいつもの朝を迎えた。

「——リカルド様は、おじ様になつても素敵だつたの。きっと、おじい様になつても素敵だと思  
うわ」

ブランシュは朝ごはんを急いで食べ終えると、マルタに昨夜の夢をすっかり話した。

「まあ、それは楽しい夢をご覧になりましたね」

マルタはニコニコと笑顔で相槌を打つてくれる。

「ええ。まるで本当に舞踏会へ行つたようだつたの。もしかしたらあれは、『先視の夢』だつたの  
かも知れないわ」

「そうかもしれませんね。ブランシュ様も『先視の王』の末裔にあらせられるのですもの」

熱心に言うブランシュへ、マルタが朗らかに笑つた。

伝説によると、シャノワール王家の祖先には未来の出来事を夢で見る王がいたそうだ。  
ただ、その夢は幸せなものばかりではなく、不幸なものもあつた。そして王は未来を視ることが  
できても、決して変えられはしなかつたらしい。

どんなに悲しい未来も知るだけしかできない己の力を、先視の王は嘆いていたという。

その後、シャノワール王家に先視の能力を持つ者は現れず、ブランシュも視たことはなかつた。

家族から手紙が届く夢を見た数日後、本当に手紙が届いたりしたことはあつたけれど、そういうのは先視とは言わないだろう。

「どうせなら、リカルド様がどの姫君をお選びになる今まで見たかつたわ。リカルド様の花嫁にな  
るお方って、幸せでしょうね」

まだ瞼の裏に残る素晴らしい夢の余韻に浸りながら、ブランシユはうつとり呟いた。

「……いつかブランシユ様も、必ずや立派な殿方と結ばれますよ。さ、急いでくださいませ。語学の先生はいつも早めにお見えになるのですから」

マルタはなぜかやけにきつぱりと断言してから、急にブランシユをせつつき始めた。

「ええ……。ティグ、今日は良い子にしているのよ」

ブランシユは立ち上がり、暖炉の上で寝そべっているティグに声をかける。

白猫はチラリとブランシユへ顔を向け、眠そうに小さな欠伸をして応えた。どうやら昨夜は、暗い室内で遅くまで遊んでいたようだ。

一日中、好きに遊んで好きな時に寝ていい猫の生活は、ちょっと羨ましい。苦手な分野のお勉強時間には特にそういう思ふ。

(でも、頑張るヒリカルド様に約束したのだから!)

ブランシユは心中で声を上げ、語学の教本と小さな黒板、白墨入れを棚から取り出す。

たった一度、短い会話をしただけなのに、ヒリカルドはすっかりブランシユの憧れとなつてしまつた。

いつかまた、ヒリカルドと会えるかもしれないのだ。その時には、シャノワールの言葉を流暢に操れるようになつていてたい。

楽しい想像を膨らませながら、ブランシユは上機嫌で勉強机に向かつた。

頭の中で何度も空想のヒリカルドに励ましてもらつたせいか、午前中の授業は驚くほどすんなりと覚えられた。教師が帰るとブランシユは勉強道具を片付け、いつものように昼食を待つ間、ティグと遊ぶ。

先に毛皮の切れ端を結びつけたりボンを揺らしてやると、真っ白い愛猫は大興奮で飛びついてきた。いつもは細い尻尾がふわふわに膨らんでいて、凄く可愛い。

彼を高くジャンプさせようとブランシユが背伸びした時、昼食をとりにいつていたマルタが戻つてきた。

「ブランシユ様……」

彼女はなぜか昼食の盆を持つていなかつた。その上、今にも泣き出しそうな顔をしている。

「マルタ、どうしたの?」

不安になつて尋ねると、マルタはブランシユの前に膝をついて震えた声を発した。

「昨日、ブランシユ様のおつしやつていた衛兵が投獄されたのですが……」「え!？」

驚いたブランシユは、思わずティグの玩具を手から取り落とした。

投獄とは確か、牢屋に入れられたという意味だつたはず。

(まさか、私のせいで牢屋に入れられてしまつたの!?)

ブランシユは昨日の夜、もうティグが逃げ出しても不安にならずに済むようにと、あの意地悪な衛兵が以前からティグにひどい言葉をかけていたのをマルタに言いつけたのだ。

マルタはそれを聞いて、とても衛兵に腹を立てていた。

ティグの脱走は勿論良くないけれど、ブランシュを脅して良い理由にはならない。明日になつたら衛兵の上司へ抗議してくれると約束してくれた。

ティグは床に落ちた玩具を前足で軽く突ついていたが、不穏な気配が気になるのか玩具を離し、ブランシュとマルタを交互に見上げ始めた。

「あのね、私は牢屋に入れてほしかつたのではなくて……ただ、ちょっとあの衛兵さんが叱られて意地悪をやめてくれれば良いと……」

おろおろと狼狽えるブランシュの片手を、マルタがぎゅっと両手で包み込むように握りしめた。

「ご安心ください。あの者は、ここに住む他の方々にも無礼な真似をしていましたので投獄されたのです。そんなことより、ティグのこと以外にブランシュ様自身にも何度も暴言を浴びせたと、尋問で白状したと聞きました……ブランシュ様の、ご家族のことです……」

とても言い辛そうに言葉尻を濁され、ブランシュは軽く目を見開いた。

「もしかして、私がお父様達に捨てられたなんていう嘘のことかしら？」

ブランシュがそう言うと、今度はマルタが涙の溜まった目を大きく見開く。

「ブランシュ様！　ずっとお一人でお辛い思いをしていらしたのですか？　私に何でもお話ししてくださいってるものと……不甲斐ない世話係で申し訳ございません！」

「違うわ！　マルタが大好きで、大切なことは何でも話しているわ。本当よ！」

エプロンを顔に押し当てる泣き始めてしまったマルタを、ブランシュは必死で慰めようとした。

「だつて、あの衛兵さんが嫌な嘘をついても私は騙されたりしないもの！　あんなつまらないことをわざわざ言わなきゃいけないなんて思つていなかつた、それだけなのよ」

「そ、そうでしたか……」

ブランシュの説明でマルタは少し落ち着いたらしく、件の衛兵が投獄された経緯を話してくれた。衛兵や侍女の中には、人質の王族へ嫌がらせをして楽しむ輩がいる。仮にも王家の者へ、ここでは平民の自分が強く出られるのだと、歪んだ優越感に浸るのだ。

そのような真似は厳罰に処すとリカルドがたびたび通告しているのに、懲りない者は出た。衛兵の一人が幼い者や気弱な人質を狙い、侍女がいない隙を狙つては罵倒して楽しんでいると噂になつていたそうだ。それを聞きつけたりカルドが、昨日の昼に現場を押さえて捕らえたらしい。

「——じゃあ、リカルド様が昨日いらしたのは、そのためだつたのね」

聞き終わつたブランシュは、しばし黙つて驚きを呑み込んでから言つた。

「申し訳ございません……取り乱してしまいまして……」

涙を拭うマルタに、ブランシュは後悔を込めて抱きつく。

「私もごめんなさい。変なことを言う人が来たら、今度はちゃんと言うわ」

いつもちよつと嫌な気分になるだけで、大したことないと思つていたけど……

考えてみれば、衛兵がマルタに隠れてコソコソしていたのは、それが悪いことだとわかつていたからなのだ。もつと早く相談するべきだつた。

そうすれば、昨日だつてティグがすぐ戻らなくても、あんなに焦らなかつたはずだ。

「はあ……何にせよ、ご無事で良うございました」

マルタはホッとしたように息を吐いて立ち上がり、廊下へ続く扉を開いた。その向こうから現れたりカルドに、ブランシュは息を呑む。

「ブランシュ姫。突然お邪魔して、失礼した」

一瞬、また夢を見ているのかと思ったが、そうではない。その証拠にリカルドはまだ若々しい青年で、ブランシュに丁寧なお辞儀をする。

「い……いらっしゃいませ、リカルド殿下……」

ブランシュもコチコチに緊張して礼をすると、リカルドが気まずそうに咳払いをした。

「こちらが押しかけたのだから、そう硬くならなくていい」

そして彼は焦った様子で、マルタへ小声でボソボソと囁く。

「私はやはり怯えられてしまうみたいだ。これで失礼するから、詳しい報告は後ほど他の者に……」

リカルドの悲しげで困り切つたような横顔に、ブランシュの胸がズキリと痛む。

父王が怖い人だからといって、なぜこの方までが恐れられなくてはならないのだろう。

「怖くなんかありません！」

思わずブランシュは叫び、リカルドに抱きついていた。彼はとても大きくてブランシュは小さいから、おなかの辺りに顔がボスンとぶつかる。

「リカルド様が凄く凄く大好きです！ もう一度お会いできるなんて夢みたいで……いつだって、いらしてくれれば嬉しいです！」

「ま、まあ！ ブランシュ様！」

マルタの慌てた声と同時に、快活な笑い声が部屋に響いた。

「これほど可愛らしい告白をされたのは初めてだ。光栄だな」

鋭く青い両目を細めたりカルドがブランシュの両脇に手を添える。そのまま、ふわりと持ち上げられた。

「ひやっ！」

一気に視界が高くなり、はるか頭上だつたりカルドの顔が真正面になる。

マルタに抱き上げてもらつたのはもつと小さな頃だった。久しぶりの行為に戸惑つたけれど、良い気分だ。

「衛兵に罵倒されていたのに、そなたが私に何も不満を訴えなかつたのは、無理をしていたのではないかと気になつてな。すまないが、先ほどの話を立ち聞きさせてもらつた」

すぐ間近にある瞳にまっすぐ見つめられて、ブランシュの胸がドキドキと大きく鼓動する。

「そなたは小さくとも、心に鋼の剣を持つた姫だな」

「え……？」

「イスパニラの古い言い回しで、強く高い心を持つていてるという意味だ」

リカルドは丁寧にブランシュを床に下ろし、片手を取つてその甲へ優雅に口づけてくれた。それから長身を伸ばし、穏やかな笑みを湛えたままブランシュを見る。

「しかしこれからは、大したことはないと思つても、妙な相手のことはきちんと侍女に報告するよ

うに。何かあつてからでは遅いのだぞ」

「はいっ！」

両手を握りしめて力一杯頷くと、リカルドの笑みがいつそう深まつた。

「ブランシュ姫……先ほどのお言葉に甘えて、またこちらを訪ねても良いだろうか？」

思いがけない言葉に、一瞬ブランシュはキヨトンと彼を見上げたが、その言葉を理解すると共に、たちまち全身に嬉しさが込み上<sup>う</sup>げた。

「嬉しいです！ お待ちしています！」

礼儀作法の授業では、上品に口を閉じて静かに微笑まなくてはならないと教わったのに、顔中が笑顔になつてしまふ。でも、リカルドは咎めたりせず、一緒にニコニコしてくれた。

その後、リカルドは約束通り、何度かブランシュを訪ねてくれた。

とはいえ戦場と城を始終行き来している彼はとても多忙だし、イスパニラの王太子が私的に人質の一人を訪ねるなど、あまり良くないことらしい。椅子に腰かけることすらせず、ほんの少し立ち話をするだけですぐに帰つてしまふが、それでもブランシュは嬉しくてたまらなかつた。

リカルドと過ごす短い一時は何にも代えがたい宝物で、外に出られないという点を差し引いたつて、囚われの庭で暮らす価値を十分に与えてくれたのだった。

## 2 解放された王女

——時は経ち、ブランシュは十七歳となつた。

背は小柄のままだが、身体つきはすっかり娘らしい丸みを帯びた。腰の下まで長くなつたまつすぐな黒髪は編み込み、革色のリボンで飾つている。

「書けたわ。監査官の方にお見せしてちようだい」

ブランシュは書き物机から顔を上げると、書き上げた手紙を封をしないままマルタに渡した。

「はい。お預かりいたします」

丁重に手紙を預かつた彼女の髪には最近白いものが増えてきた。

「申し訳ないけれど、お姉様の式に間に合うよう急いでほしいとお伝えしてね。ようやくお支度が整つてのご結婚ですもの。私の祝辞まで遅れてはあんまりでしよう？」

ブランシュは念押しをする。

今日の手紙は、祖国の七番姫である姉が来月に隣国へ嫁ぐという知らせを受け、急いで書いた祝いの手紙だ。

離宮で暮らす人質達は、誰に宛てるどんな内容の手紙でも、王宮監査官を通さなければ出せない決まりだった。良からぬことを企む暗号などが隠れていないか、そういう分野に詳しい役人が何人

かで確認するらしい。

勿論、外から届く手紙や贈り物も全て、一度開封して中身を厳重に調べられてから届けられる。あまり気分が良くないけれど、他人に読まれて困る手紙など最初から書くつもりがないので、ブランシユは特に憤慨はしない。

ただ、監査官達は仕事熱心ではないみたいで、催促しないと彼らの手もとで半月も手紙が滞ることがあるのには困った。

「かしこまりました。大至急と他の方々にも聞こえるよう、しつかりお伝えしてきますわ。あの方達は、居眠りの時間たまには減らすべきですもの」

マルタが深く頷く。眞面目で働き者の彼女は、日頃から監査官の怠惰が気に入らないのだ。

張り切った調子で彼女が出かけると、ブランシユは窓際に行き、秋の陽光が降り注ぐ小さな中庭へ目を向けた。

大陸西南方に位置するイスパニラ王都は、冬でも霜の降りぬ温暖な気候だ。そのため、秋に入つてもまだかなり気温が高く、ブランシユは亞麻布の涼しいドレスを着ていた。

常緑樹の垣根は年間を通してその色を変えないが、小さな花壇にマルタと一緒に種をまいた秋の花が咲き始めている。

明るい陽射しの中、すんなりとした長い尻尾を揺らした白い猫が花壇を優雅にすり抜ける姿が、今にも見えるような気がした。

ティグは、もういないのに。

素敵な尻尾が自慢の親友は、二ヶ月前にブランシユの膝ひざで眠つたまま安らかにその生涯を終えた。『猫にしては長生きした方ですし、こんなに幸せそうな顔で眠りについたのだから、ティグは満足して旅立つたのですよ』

マルタがそう言つて慰めてくれたものの、かけがえのない存在を亡くした喪失感は大きく、ブランシユはしばらく食事も喉を通らなかつたものだ。

また他の子猫を迎えるか、いつそ今度は小鳥をつがいで飼つてみたらどうかとマルタに提案されたが、今はティグと幸せに暮らした思い出だけで十分だから断つた。

母親同然の侍女に心配をかけまいと気持ちを切り替えるように努めてはいるものの、ふとした折に寂しさが込み上げる。

(リカルド様とお話しできるようになったのも、ティグがいてくれたからだつたわね……)  
髪に小枝と葉っぱをくつつけて、垣根越しに白猫を返してくれたりカルドの姿は、今も鮮やかに記憶へ焼きついている。

懐かしさと寂しさの入り混じった感情に、ブランシユは小さく口もとを引き結んだ。

最近では、リカルドがここを訪れることもなくなつていてる。

(昔は数ヶ月に一度くらいお顔を見せてくれたのに、二年もリカルド様にお会いしていない)  
ブランシユはもう幼い少女ではないので、リカルドが私的に訪問するのは好ましくなくなつたのだ、とマルタが言いにくそうに教えてくれた。

『リカルド様はブランシユ様の将来を考えて、たとえ根も葉もない噂でも立たないようにどこかに

くださったのです』

マルタは噂の内容までは詳しく教えてくれなかつたが、とにかく結婚する予定のない大人の男女が一人で会うのが良くないことはわかつた。

マルタを困らせたくはなかつたブランシュは素直に頷いたのだ。

でも、悲しかつた。

大国の王太子であるリカルドの妃になりたいだなんて、大それたことを願うわけではない。ただ、ほんの少しお顔を見て、僅かな会話をするだけで幸せだつたのだ。

それもいけないと言われてしまふのなら、大人になどなりたくない。リカルドに会うために、ずっと子どものままでいたかつた。

(それでももう、私は大人になつてしまつたのだから我慢しなくてはね)

ブランシュは自分に言い聞かせる。

最後にリカルドがここを訪れた日に、いつもは別れ際に笑顔で手を振る彼が、とても真剣な様子でブランシュの両手を握りしめたのを思い出す。

『私がこのようなことを言えた義理ではないが……そなたが一日も早くご両親と再会して、幸せに暮らせることを祈つて』

そしてリカルドはブランシュの手を離すと、一人前の貴婦人にするように恭しく礼をして、離宮を出ていった。

多分、彼はブランシュに諭したつもりだつたのだ。小国の王女を娶るつもりはないから、これか

らは会わないと。

言いようのない寂しさを堪えたくて、ブランシュはもつと現実的な問題に思考を逸らす。

ここに来て随分、時が流れた。

今、シャノワールの王室にいるのは、ブランシュの父母である國王夫妻と、来月に隣国へ嫁ぐ七番目の姉姫。それから次期女王となるべく婿をとつた第一王女の長姉夫妻と、その間に生まれた四人の姫……つまり、ブランシュの姪達だ。他の姉達は近隣國の王家や家臣に嫁いでいる。

マルタは、そろそろ誰かが人質役を交代してくれるかもしれないと言う。

一歳は流石に幼すぎるが、僅か四、五歳で人質に来た者は、ブランシュの他にもいる。

そうした場合、年頃になると人質を交代してもらう人が多いのだ。特に姫の場合は、政略結婚をするにも跡継ぎを産むにも若い方が有利なため、殆どが十代半ばで他の者と交代して祖国へ帰る。

リカルドが昔、祖国の言葉を覚えておくようにと教えたのも、こういう意味たつたのだろう。

しかし、シャノワール国の状況を考えるに、ブランシュはまだ当分ここにいる方が良いのではないかと思うのだ。

シャノワール国は裕福ではない。特にここ数年は羊の間で悪い病気が流行り、国の財政は困難を極めているみたいなのだ。はつきり言われたわけではないが、マルタが仕入れててくれる祖国の

情勢や両親の手紙に記された細かな事柄から、そうした経済事情を察することができた。

さつき結婚祝いの手紙を宛てた七番目の姉だつてブランシュの五つ年上で、この辺りの国の王家では嫁き遅れと言われるギリギリの年齢だ。

そもそも姉と隣国第三王子の結婚は、幼少期から決まっていた。

手紙では婚礼道具の準備が整わなくて……などと瀆されていたが、おそらくは持参金をなかなか用意できずに、輿入れが三年も遅れたに違いない。

シャノワール及びその周辺国では、女性の輿入れには身分に合わせた持参金を持たせるのが常識だそうで、王家の姫ならば相当額を用意する必要がある。

両親——特に母は、ブランシユの結婚についても随分と気にしてくれているようで、王妃の公務を長姉に任せ、自分が人質を交代しようかと手紙に記してくれた。

娘が辛い人質生活の中でさぞ祖国を恋しがっているだろうと思い込んでいる母は、ブランシユをシャノワール国内の自分の認めた相手に嫁がせたいと熱望しているのだ。

だから、ブランシユが嫁ぎ遅れにならないうちに國へ帰りたいと手紙を出せば、母はそうしてくれるかもしれない。ただ、多額の持参金はそうすぐに用意できないはずだ。

持参金は後妻に入るならば不要……つまり、ブランシユが今すぐ帰国してどこかに嫁ぐなら、誰かの後妻にならなければいけない。

母はその辺りのことも考えていて、もしもブランシユが帰国して縁談を望むならと、フォンヌ侯というシャノワール国の貴族を紹介してくれていた。

母によると、愛妾あいぜきもおらず、少し年が離れているけれど非常に好人物だそうだ。

ブランシユは、多少の年齢差や後妻になることについて文句をつける気はない。

——しかし、多少どころか、フォンヌ侯とは祖父と孫ほどの年齢差で、しかも彼の一人息子

はブランシユの二番目の姉と結婚しているのだ。流石さすがにこれには待つてと言いたい。

細かいことを気にする性質ではないが、できれば実姉の義母になるような、ややこしい状況は避けたいものだ。姉やその夫だって複雑な気分になるだろう。

そこまで無理のある結婚をし、母を代わりの人質にしてまでここから出たいかと言えば、答えは否だ。

決して優しさだけではなく打算的な思いからも、ブランシユは母の申し出を辞退していた。

(……やっぱり、私は結婚なんか望まずに、ここにいる方が良いわね)  
ブランシユは胸中うなずく。

もしも自分が絶世の美姫や何かとてつもない才能の持ち主だったなら、持参金なしでも妻に望んでくれる人がいるかもしれないが、窓に映る姿を見れば現実がわかる。

肌の色こそ白いものの、いくつになつても子どもっぽさが抜けない丸い顔立ちに、小柄で胸だけ大きいバランスの悪い体格。

中身の方は、リカルドの言葉を励みに苦手だった語学も含めて勉強を頑張ったので、今では数ヶ国語を自在に話せるし、算術や刺繡、楽器演奏なども一通りはこなせる。

でも……一国の王女としては、それくらいはてきて当然らしい。  
イスパニラ貴族の子女を教えてきたという数人の教師達は、ブランシユの見た目も能力も落第ではない程度だと評価する。

身分は王女とはいえ、所詮は小さな属国。大国イスパニラの中堅貴族と大差はないので、くれぐれも

れも自惚れないようになると、口を揃えて言うのだ。

マルタは、教師達は属国の王女が自国の貴族より優れているのが気に入らないだけで、公平な者ならばブランシユをもつと高く評価するはずだと我がことのように憤慨している。

教師だけではなく、イスパニラ国民の多くが無抵抗で属国化を選んだ國の王族を蔑む傾向があつた。よつて、不當に評価を下していると言うのだ。

マルタの気持ちは嬉しかつたが、彼女の場合は逆に甘すぎる傾向があるだろう。だから、ブランシユは差し引き中間くらいと思うことにした。つまり、中の上くらいだ。

飛び抜けた魅力も持參金も生家の力もない。そんな姫を引き取つてくれる物好きがいるとは考えられない。

だからずつと自分が人質になつていても構わないとさえ、最近では思つてゐる。

別に、自己憐憫に浸つての犠牲精神ではない。

自分が外の世界を知らぬいせいかもしれないが、ここ的生活がそう悪くないと感じてゐるからだ。

ここには大好きなティグと暮らし、リカルドを迎えた楽しい思い出が詰まつてゐる。

もうブランシユの傍に来てくれることはなくたつて、ティグの墓は庭の隅にあり、リカルドは広い王宮のどこかに暮らしていた。

直接には会えなくとも良い。大好きな相手の傍で、独り身のまま静かに人生を過ごすのも悪くない、と、本当にそう考へてゐるのだ。

(……リカルド様は、そろそろお妃を迎えるのかしら?)

リカルドは相変わらず戦場と城を往復していふと聞く。未だに王太子妃を迎えていないが、好きで自身を貰くというより、単に忙しくて結婚どころではないようだ。

いずれ王位を継ぐ彼は、ブランシユのように独り身でも良いなどとは言えない。いつかは花嫁を娶つて世継ぎを設ける義務がある。

だが、彼が結婚相手に焦ることはないだろうと、ブランシユは思った。

「リカルド様のように素敵なお男性なら、どんな姫君だって断るはずがないわ」

少しひんやりするガラス窓に額を押し当て、目を閉じて呟く。

幼い頃に夢で見た舞踏会で多くの美姫に囲まれてゐるリカルドの姿が、瞼の裏に鮮やかに浮かんだ。

その日の深夜。ブランシユはふと、遠くから聞こえる犬の咆哮に目を覚まし、寝台から起き出した。

イスパニラ王都では、とても沢山の犬が飼われ、野良犬も多いと聞いている。

イスパニラが農牧で生計を立てていた頃は牧羊犬が重宝されたし、軍事国家となつてからは軍用犬として活躍するようになったからだ。

侵入者や脱走を阻む目的で、囚われの庭でも夜中には大きな番犬が放たれてゐる。

しかし、吠え声はこの近辺ではなく、イスパニラ国王達の住む本殿の方から聞こえてくるようだ。(何か、あつたのかしら……?)

ぞくりと背筋が寒くなり、ブランシユは急いで寝台へ戻る。

そして気にしてたつてどうにもならないのだと、自分に言い聞かせた。

本殿で何かが起つても、わざわざ囚われの庭へ告知されることなど殆どない。

ブランシユはここから出られず、リカルドが今王宮にいるのか、それともどこかへ出ているのか知らないのだ。

ここで眠つて起きて、変わらぬ一日を大人しく過ごしている。明日も、明後日も、次の日も、その次の日も……

頭までかけ布を被り、目を強く瞑る。

しまいに痛くなつてきた瞼を薄く開くと——ブランシユはいつの間にかちやんと着替えて、応接間と勉強部屋を兼任している部屋で椅子に腰かけていた。

マルタはテーブルの脇に控え、ブランシユの向かいには見たことのない白髪の老人が座っている。

(……あら?)

これは、いつか見た舞踏会と同じよう、音のしない現実味のあふれる夢だ。

ブランシユは自分が眠つているのだとほつきりわかつた。

(どなたなのかしら?)

目の前にいる全く知らない老人を戸惑いながら見つめる。

ゆつたりした長衣を着込んだ老人は髪も髭も真っ白く、服装からして学問に携わる者ようだ。

今までブランシユに用意されたイスパニラ人の教師は、いずれも高圧的でこちらを見下した態度

を隠さない人ばかりだつたのに、彼の雰囲気はまるで違う。

柔軟な顔立ちに穏やかな笑みを湛えた老人は何か喋つてゐるみたいで、ゆつくりと口を動かした。

——やつぱり、ご相談して良かつたわ!

不意に、頭の中にそんな歓喜の声が浮かんで、ブランシユは驚いた。

やつぱりも何も相手が誰か知らないし、自分はこの人に何を相談したのだろうか?

とても重要な気がするのにそれが何なのかわからず、尋ねようにもブランシユの喉から声が全く出ない。

焦つてパクパクと口を動かしていたブランシユは、ふと老人のゆつたりした袖口に視線を留めた。

左右の広い袖口からは、そこにあるべきものが見えない。

(この方は、手が……)

驚くブランシユの前で、両の手首から先を失つてゐる老人が、慣れた仕草で口にペンを咥えた。

その瞬間、グニヤリと景色が歪んで消え、代わりに激しい音が耳に飛び込み——

ブランシユは目を開いた。

「ブランシユ様! ブランシユ様!」

しばらくぼんやりしていたブランシユは、夢を終わらせたのが寝室の扉を叩く音といつになく慌てふためいたマルタの声だと、数秒経つてから気がついた。

「あふ……どうしたの?」

寝惚け声で返事をすると、血相を変えたマルタが部屋へ飛び込んできた。

「大変です。今しがた、衛兵に知らされたのですが……」

告げられた言葉はブランシュを心底から驚かせ、夢のことなどすっかり吹き飛ばしてしまった。

——昨晩、ディエゴが突然倒れてリカルドに政権を譲り、事実上、王位が交代した。

イスパニラ史上、最強にして最悪の暴君と密かに呼ばれていたディエゴは、歳六十を超えても猛獸のような頑強な身体と気迫に衰えを見せず、少なくともあと二十年は権勢を振るうだろうと囁かれていた。だが、倒れたきり回復することなく、翌月には前王となる。

そして、彼の葬儀と同時に、リカルドの戴冠式が行われたのだ。

勿論ブランシュが式典を目にすることはできず、いつも通りに離宮で過ごしただけだったが、遠くから新王リカルドを祝う声が風に乗って聞こえてきた。

リカルドが王となつたのを多くの民が喜んだ。

嘆いているのは前王に取り入つて私腹を肥やしていた者だけだと、マルタが教えてくれた。

戴冠後リカルドが一番先にやつたのは、そうした汚職者達に予め調べ上げていた証拠を突き付け、王宮から追い出すことだつたらしい。

それから、属国を管理するという名目で派遣され、各地で横暴な振る舞いをしていたイスパニラ軍の規律を徹底的に叩き直し始めているという。

そんなりカルドの片腕となつて補佐しているのは、王弟のセシリオだ。

幼い頃の落馬で片足を少し悪くしてしまつたセシリオは戦地に出たことこそないが、学者も舌を

巻くほどの頭脳の持ち主だと有名だつた。

妻腹でリカルドとは母親が違うせいか、以前の彼らはすれ違つても視線すら合わせないくらい陥悪たつたそうだ。

だが、父王が亡くなると、今までのことが嘘だつたように仲良く宫廷の改革を始める。

前王は兄を弑逆して王位を奪い、家族や兄弟の愛情は王家に不需要だと公言していた。どちらも十分な実力を持つ二人の息子が仲良くしていれば、結託して王位を奪わないか心配となり、難癖をつけて処刑していたかもしれない。

リカルドとセシリオは、父の目を欺くために今まで仲の悪いふりをしていたのだろうと、人々は噂しているようだ。

それが真実なのか嘘なのか、ブランシュにはわからない。

セシリオに会つたことはなく、リカルドの口から弟の話を聞いたこともないからだ。でも、彼が弟と仲良くできているのなら純粹に嬉しい。そう思った。

リカルドが即位してから、あつと言つ間に一ヶ月が経つ。

各地では新国王による大きな改革のせいでのせわしない日々が続いているそしがたが、ブランシュの单调な生活に影響はなかつた。

強いて言えば、つけられていた教師が先週突然、辞めてしまつたくらいだ。

その教師は属国の王家を特に蔑んでおり、『恥をかなぐり捨てて王冠へしがみついた痴れがまし

い一族の者へ、イスパニラの高等な教育を施すなど厚遇すぎる』と常々ぼやいていた。だから、ブランシユの教師を辞めたのは王宮の事情とは関係なく、嫌気が頂点に達しただけかもしない。

教師の教えることに逆らつてはいけないというのが囚われの庭の規則だつたから、ブランシユは自国の王家を含めた属国を侮辱されても、黙つて大人しく聞いていた。

だが本当は、彼らの考えは所詮、強い国力に守られた者の甘い考え方だと思っている。

実際に大切な仲間を大勢抱えた状態で圧倒的に巨大な敵と対峙してみたら、彼らの意見も変わるだろうに。粗末な剣一本に等しい小國の力で、強大なドラゴンのようなイスパニラ国に歯向かうのが、勇気ではなく愚行だと思い知るはずだ。

無謀な戦いで全員が散るよりも、一人を生贊に差し出して他の者を見逃してもう道を選んだだけ。その生贊となつたのが、囚われの庭の住人達だ。

シャノワール国の大妃である母だつて、ブランシユが望むならいつでも人質を代わると言つてくれている。臆病風に吹かれ、王冠にしがみついているわけではない。

今まで教わった教師はそうしたことをわかつてくれない人ばかりだつたから、マルタから来週に新しい教師が来ると聞いても、ブランシユは喜べなかつた。

バスコ卿というその老教師は、かつては王立学院で教鞭をとつたこともある高名な学者らしい。それを聞いて、いつそげんなりした。

そんなにお偉い人ならとびきり嫌味な、鼻もちならない頑固な老人で、属国の王家は恥知らずだとまくしたてるだけだと思ったのだ。

そして週明けの午後。

「——お目にかかるて光榮です、ブランシユ王女」

バスコを迎えたブランシユは、丁重に挨拶を述べる白髪の老人を前に、キヨトンと目を丸くしてしまつた。

どんなに嫌な教師が来るかと身構えていたのに、彼は想像と全然違う柔軟で礼儀正しい人だつたのだ。

しかし、ブランシユを驚かせたのは、卿の感じの良さだけではなかつた。

「こちらこそ、光榮にございます。未熟者ではありますが、宜しくご指導願います」

ブランシユも挨拶を返しながら、気づかれないように老人のゆつたりした袖口に目を向ける。そこには左右、どちらも手がなかつた。

(あれは、ただの夢だつたはずなのに……)

前王が倒れた夜、ブランシユはまだバスコの存在を知らなかつたのに、夢の中でテーブルの向かいに座る彼を見たのだ。

ブランシユが戸惑つてみると、バスコはそれを別の原因だと解釈したらしい。手の出ていない袖をひょいと上げてみせ、ニコリと微笑んだ。

「昔、ちょっとしたことで両手首から先を失つてしまつたのです。驚かせてしまいましたかな？ なに、授業に支障は出しませんのでご安心ください」

「あつ！ いえ……そ、それに、バスコ卿はお口でペンを使うのに慣れていらっしゃ……っ！」

不羈な態度を取つてしまつたと、焦るあまりブランシユは夢で見た光景を口走つてしまい、慌てて口を押さえる。見ると、バスコはにこやかに頷いてくれた。

「私の経歴と一緒に、それも聞いておられましたか」

「え、ええ……はい……」

王宮から渡されたバスコの経歴に両手については全く書かれていなかつたが、まさか以前に夢の中で見ましたとは言えない。

あいまいに答えると、傍にいたマルタが一瞬だけ不思議そうな目をこちらに向かた。けれど特に突つ込まないまま退室してくれ、ブランシユは感謝する。

現実に対面したバスコは、夢で思った通りに感じの良い人で、尊敬できる人物だつた。

教える歴史や現在の各国の情勢は、イスパニラにとつて都合の良いだけの前任の者の教えとは随分と違う。

「——私もイスパニラ人ゆえ、自國を覇負したい気持ちはあります。けれど、この国の悪いところをきちんと教えなくては、國の良い部分を話しても信用してもらえないでしょう」

穏やかに言うバスコに、ブランシユも素直に胸にあつたことを話せた。

「ええ……失礼ながら私、以前の先生は全く信用できませんでしたの。けれど、こちらの國の本当に良い部分も信用できなくなつていたら悲しいと思つていました。ですから、信頼できる先生にお会いできて嬉しいですわ」

するとバスコは、いつそう嬉しそうに目を細めた。

「私が王都へ戻つてこられたのはリカルド陛下のおかげです。そればかりか、こうしてまだ命があるのさえ……」

「まあ、それは一体……？」

何やらいわくありそな彼の言葉にブランシユが首を傾げると、老学者は両手首の覗いていない己の袖口へチラリと視線を落とした。

彼は口でペンを巧みに操るだけでなく、足先を器用に使い、必要なことは全部できる。両手を失つてから、そのように訓練したそうだ。

「私はかつて、貴族のご子息が寄宿する王立学院で教師をしておりましたが、頭の固い頑固者ゆえ、自國だけを覇負して事実を歪めるような教えはしたくなかったのです。その結果、前国王陛下のご不興を買つてしまいましてな。当時、王太子だつたりカルド様に命を救われました。それで、教職を辞めて実家のある辺境へ帰つていたのですが、このたび陛下に呼び戻していただいたというわけです」

リカルドがどのような手段で彼を救つたのかバスコは教えてくれなかつたが、ブランシユは胸の奥が温かくなるのを感じた。

長らく会つていない彼は今やこの強大な國の王で、生贋達を手中に收めるドラゴンになつた。けれど、バスコを教師に寄越し、属國の王女にも優しく誠実なままだと証明してくれたのだ。

國同士の駆け引きや争いは、きっと綺麗事だけでは済まないだろう。

離宮から出たことがなく、教えられた情報や書物から得た知識しかしないブランシユには想像のつ

かない部分があるに違いない。

そんな生贊達に間違った教えを吹き込むのを良しとしない彼は、やっぱり今もブランシュの憧れで大好きな人だつた。

やがて秋が過ぎて肌寒い冬を越し、次第に陽が暖かくなつていった。そして花壇に春の花が咲き始めた頃、属国の王達との会見をまとめたりカルドは、囚われの庭にいる者全員の解放を宣言した。

「え……？」

部屋に駆け込んできたマルタからその知らせを聞いたブランシュは、驚きのあまり読んでいた本を床に取り落とした。

「これでようやくブランシュ様は本当のご家族と暮らせるのですね……寂しゅうございますが……お、おめでとう、ございます……」

「そう……私、本当の家に帰れるのよね……」

ブランシュは頷き、自分で口に出して言つてみた。

半ば諦めていたとはいえ、家族に会いたい気持ちはある。父や母に抱きしめてもらつたら、きっと幸せだろう。

しかしなぜか、嬉しさとか感激とか、そういうものがちつとも湧き上がつてこない。故郷の記憶がまるでないうえに、唐突すぎて実感が湧かないからだろうか？

（お父様もお母様もお姉様達も、私が帰つたらきっと喜んでくださるわ）

心を故郷に向けようと、ブランシュは胸の中で自分に言い聞かせる。

皆、心の籠つた手紙をあんなに沢山くれたのだ。歓迎してくれるに違いない。必ずこう言うはずだ。

『ブランシュが帰つてこられて本当に良かった。辛い人質生活をさせてすまなかつたね』

自然とそんな言葉が浮かび、ズキンとブランシュの胸が痛んだ。

父も母も、ブランシュを人質にしていることを、いつも手紙で謝つていた。

ブランシュが民を守るのは王女の義務として受け止めているので気に病まないようになると返事しても、国王と王妃以前に親として割り切れぬ想いがあるらしい。

リカルドのことは書けないにしても、侍女のマルタが親切で辛い目になど遭つていないと正直に書いているのに、監視付きの手紙は本音と違うと思つていいようだつた。きっと両親の想像の中では、ブランシュは辛く悲しい環境でイスパニラ王族に苛められながら、毎日泣き暮らしていることになつてゐるのだろう。

そうした手紙の文は監査官に塗りつぶされてしまふけれど、前後の文面からだいたい予想がつく。

（そうではないのに……）

たとえ他の人質王族にこの生活が不満な者がいたとしても、ブランシュは違う。

少し退屈で窮屈だけれど、マルタから大切に世話をされ、ティグと楽しく遊び、素敵なりカルドと出会えたのだ。

気がつけばブランシユは、とんでもないことを口にしていた。

「マルタ……もしも、だけれど……お城で働かせてもらうなどして……私はもう少しここに残つてはいけないかしら？」

「ブ、ブランシユ様？」

あんぐりと口を開けたマルタへ、ブランシユは慌てて告げた。

「勿論、リカルド陛下のお心遣いには感謝しているわ！ 本当よ！」

この人質解放は、リカルドの努力の結晶だ。それはバスコから聞いている。すっかりブランシユと親しくなったバスコは、リカルドが離宮に住まう人質の大半から酷く憎まれ畏怖されていることを嘆いていた。

前王ディエゴの所業や、リカルドが王太子として父の片腕となり筆頭将軍を務めていたのを念頭に置けば、彼らの気持ちもわからなくはないとバスコは言う。

人質達とて前王の残虐さは承知しているし、リカルドが自身の周辺人物を護るために父王へ従わざるを得なかつた、と理屈ではわかっている者もいる。

けれどリカルドが必死に軍を率いて戦い抜いた結果、多くの国が滅んだ。それに伴い、多数の王族が処刑され、また数え切れぬほどの民が生活と自由、家族、財産を奪われた。

勿論、リカルドの剣一本が全てを奪つたわけではなく、国同士の戦の結果だ。

けれど、その責任と恨みの一切を負うのが軍の頂点に立つ者の義務であり、父親から押し付けられた悪鬼の役割だつた。

だからリカルドは、父王が無理に集めた人質に罪悪感を抱き、全員の解放を願つていたそうだ。しかし、彼が王になつた今でも容易にはできないだろうと、バスコは予想していた。

何しろ人質を解放すれば、これまで抑え付けていた属国が結託して反撃する可能性がある。

リカルドの戦上手は有名だし、強大なイスパニラの軍事力をもつてすれば小国が束になつても敵わないだろうが、それでも家臣達からは賛成されないはずだ。

最悪の事態に備えての対処案、人質解放によつて得られる利点。それをきちんと家臣に説明し、納得させなければならない。属国との交渉はそれからだ——と、リカルドが父王のような暴君でないのならなぜ自分達を解放してくれないのかと問う離宮の人質に、バスコは説明していたそうだ。

——その困難な人質解放を、リカルドはたつた半年で実現した。一体、どれほど 苦労をしたのだろうか。

解放されるブランシユは、彼の努力と優しさに感謝をして帰国を喜ぶべきなのに……

「祖国とはいえ、見知らぬ国も同然と、ブランシユ様が不安になるのはわかります。ですが、貴女様のような賢く可愛らしい姫君でしたら、どこでも上手くやつていけますわ。祖国の言葉も熱心に学ばれたのですから不自由もしないでしょう」

マルタはブランシユの言葉を不安に駆られたせいだと解釈したらしく、優しく励ましてくれた。

「違うの。ただ、シャノワール国に帰つたら二度とリカルド様にお会いできないと……」首を横に振つてブランシユが告げると、マルタに今度は沈痛な視線を向けられた。

「ブランシユ様が昔から陛下をどれほどお慕いしているか存じております。陛下も貴女を大層可愛

がつておられました。しかし、もじご寵愛ちようあいを受けられたとしましても……

言い辛そうに言葉を濁すマルタへ、ブランシュは目を見開いた。

「まさか！ そんなことは考えてないわ。勿論、リカルド様の花嫁になれたら幸せでしようけれど、私ではとても釣り合わないのは承知よ。もうそんな夢を見る子どもではないの」

ブランシュはきつぱりと言い切る。

何しろ自分は持参金すら用意できない貧しい小国の王女だ。イスパニラ国では、花嫁に持参金の風習はないが、属国の王女というだけで十分に蔑さげすまれる。

祖国を恥じる気はないけれど、自分の気持ちと世間一般の評価は別だし、何よりも結婚相手を選ぶのはリカルド自身だ。

そう考へても、たいして胸が痛まないのだから、リカルドに抱く『好き』という想いは恋というよりも憧あこがれの部類かもしない。

「……私はリカルド様にお会いできてとても嬉しかったわ。マルタも大好きだし、ティグもいて、ここで幸せに暮らしたの。私達、囚われの庭の者が快適に暮らせるように、リカルド様は大変気を遣つてくださっていたのでしょうか？」

マルタは頷いた。

「はい。それだけでなく、夫と子を亡くして氣落ちしていた私に、ブランシュ様付きにならないかと勧めてくださったのもリカルド様です」

「そうだったの……」

初めて知つた事実にブランシュは驚いたが、肝心な話を続けた。

「でも、私が幸せだと手紙で知らせてても、お父様もお母様も信用していないようなのよ。私がリカルド様に苛めいじられているのに嘘を書かされていると思い込んでいるみたい」

「ええ。検閲済みの手紙では、そう感じられるのも当然かと思います」

監査官達の、言いがかりとしか思えないようなくだらない書き直しの命じ方を思い出したのか、マルタは顔をしかめて同意した。

ブランシュが幼い頃は家族からの手紙を彼女が読み聞かせてくれていたのだ。文字が読めるようになつて以降もブランシュが望んで一緒に読んでもらつてている。

シャノワール国王夫妻がブランシュの境遇を心配しているのをマルタは承知していた。

「そうよね!? だから、もしもリカルド陛下のお許しがいただければだけれど」

ブランシュは両手を打ち合わせ、ここぞとばかりに畳みかけた。

「せめてあと一年か二年ほど、自分の希望でここに残つてみたいの」

「ブランシュ様の希望で？」

今まで自分の意思で居場所を決めたことが一度もなかつたからか、全身が強張ひきつって冷や汗が滲む。

「ええ！ リカルド様のおかげで私は小さい頃からここ的生活を楽しめたし、せっかく離宮から自由に出られるようになつたのだから、しばらく王宮勤めをしてみたいと、監査官を通さないで家に知らせたいの！」